

平成19年度 第2次小樽市温暖化対策推進実行計画の推進状況

1. 実行計画の削減目標

計画期間中の温室効果ガスを、各年度において1990（平成2）年度の排出量から6%以上削減する。
(計画期間：平成18～22年度)

2. 温室効果ガス総排出量の目標達成状況

(トン-CO₂)

	1990(H2)年度	2007(H19)年度	増減量	増減率(%)
温室効果ガス総排出量	36,051	32,108	3,943	10.9

目標6.0%以上削減に対し、実績10.9%削減で達成。

3. 平成18年度との比較（第2次実行計画初年度結果との比較）

(トン-CO₂)

	2006(H18)年度	2007(H19)年度	増減量	増減率(%)
温室効果ガス総排出量	31,889	32,108	219	0.7

温室効果ガス別・調査項目別の排出量 (二酸化炭素換算 トン-CO₂)

温室効果ガス	調査項目	2006(H18)年度	2007(H19)年度	増減量	増減率(%)
二酸化炭素	公用車 燃料消費	ガソリン	279	292	13 4.7
		軽油	584	472	112 19.2
	灯油 (冬季排出分)	3,729 (3,729)	3,620 (3,620)	109 (109)	2.9 (2.9)
	A重油 (冬季排出分)	10,121 (7,800)	9,791 (7,509)	330 (291)	3.3 (3.7)
	液化石油ガス(LPG)	43	42	1	2.3
	都市ガス (冬季排出分)	321 (214)	328 (224)	7 (10)	2.2 (4.7)
	電気使用量 (冬季排出分)	16,195 (4,295)	17,010 (5,247)	815 (952)	5.0 (22.2)
	メタン	下水処理	405	408	3 0.7
一酸化二窒素	自動車走行	14	12	2	14.3
	麻酔剤	195	130	65	33.3
ハイドロフルオロカーボン	カーエアコン	3	3	0	0.0
温室効果ガス排出量		31,889	32,108	219	0.7

冬季排出分は、その調査項目におけるロードヒーティング及び暖房による排出量

冬季エネルギー消費による排出量 (二酸化炭素換算 トン-CO₂)

内訳	冬季排出	温室効果ガス排出量	2006(H18)年度	2007(H19)年度	増減量	増減率(%)
			31,889	32,108	219	0.7
内訳	冬季排出	ロードヒーティング	4,773	5,724	951	3.0
		暖房	11,265	10,876	389	1.2
		その他	15,851	15,508	343	1.1

4. 点検結果の評価と今後の取組

(1) 1990(平成2)年度比10.9%減、削減目標6%以上を達成

2007(平成19)年度の温室効果ガスの総排出量は、32,108トンで、1990(平成2)年度より3,943トン減少し、削減率は10.9%となり、削減目標の6.0%以上を上回り、目標を達成している。しかし、2006(平成18)年度の第2次実行計画初年度の結果と比較すると、219トン増加し、増加率は0.7%となった。

(2) 最大の増加要因は、冬季1月、2月の気温の低下と降雪量の増加による影響

温室効果ガス別・調査項目別の排出量をみると、2006(平成18)年度に比べて増加したものは、電気814トン増(冬季排出分952トン増) ガソリン14トン増、都市ガス7トン増、下水処理微増となっている。電気814トン増の内訳は、ロードヒーティングが951トン増、ロードヒーティング以外が137トン減となっている。ロードヒーティング増の要因としては、2007(平成19)年度の冬が2006(平成18)年度に比較して、一年を通して最も冷え込みの激しい1月、2月の気温が低かった上に、降雪量が多かったことが考えられる。【下記気象データ参考】

減少したものは、A重油330トン減(冬期排出分291トン減) 軽油112トン減、灯油109トン減(冬季排出分全量) 麻酔剤65トン減となっている。

冬季エネルギー消費による排出量をみると、前年比で219トン増加となったが、その内訳は、ロードヒーティングが951トン増加しているものの、暖房は389トン、「その他」についても343トン減少し、温暖化防止に向けた取組の日常業務や施設管理等における職員の環境配慮行動も着実に成果を上げているものと考えられる。

2007(平成19)年6月で室内プールが閉鎖されたことにより、前年と比較しA重油と電気使用量で479トン減少し全体への影響は1.5%で、ロードヒーティングは全体への影響は3.0%であった。

(3) 今後も環境配慮行動の徹底を推進

2007(平成19)年度の温室効果ガス排出量は、第2次実行計画の削減目標を大きく上回っている。温室効果ガスの削減量は、冬期間の気象条件により大きな影響を受けるが、2007(平成19)年度は寒かったにもかかわらず暖房による温室効果ガスの排出量は削減され、職員一人一人による温暖化防止に向けた取組の成果が現れていると考えられる。

今後も各年度において削減目標を達成し続けるために、環境配慮行動の徹底を図っていく必要がある。

(参考 気象データ)

月	平成18年度			平成19年度		
	気温	降雪量	最深積雪	気温	降雪量	最深積雪
4月		22	71		3	43
11月		10	5		23	8
12月	-0.5	115	44	-0.8	78	36
1月	-1.9	131	63	-4.5	178	81
2月	-1.4	117	80	-3.2	164	126
3月	0.5	129	92	2.7	22	113
	平均気温	降雪累計	最深積雪	平均気温	降雪累計	最深積雪
	-0.8	524	92	-1.5	468	126